

---

# 黒き旅人はのんびりと世界を渡らされる

零条シズク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒き旅人はのんびりと世界を渡らされる

### 【NZコード】

N8933S

### 【作者名】

零条シズク

### 【あらすじ】

主人公朝比奈夜々（あさひな やや）が明るくやさしいクラスメイトと共に異世界に飛ばされる、そんな物語です。主に主人公視点ですが、たまにいろんな人に視点は変わっていきます。はてさて主人公は元の世界に帰れるのか？そもそも帰る気はあるのか？いろいろ見ものだと思ってください。初めての投稿作品（処女作っていうんでしたつけ？）ですが、どうか見守っていてください、アドバイスあつたらよろしくお願ひします。

## プロlogue前 現実逃避したつていいじゃないか（前書き）

はじめまして零条です、読者の皆さんは忙しい人も暇な人もいるかもしれません、見てくださいあります、ではでは「黒旅」スタートです！

プロローグ前 現実逃避したっていいじゃないか

どうしてこんなことになつたんだろう?

なんで俺たちは異世界は飛ばされているんだ？ なぜか？

それにしてもこれがどうしようか

とにかく今までの経緯を回想しながら

あれは学校から帰っていの途中のことだ

俺はい「も通り、学校を出て下校中、俺の通っていた学校は制服指定がなく校章さえつけていれば何でもいいという、いわゆる加減な学校、校長曰く、「みんながおんなじ服とかつまんないじゃないか!」とのこと、何を考えているのやう。

まあ話を戻して、そんなわけで俺の服装は黒のスボンに青のシャツ、白のベストに赤いコートといういい加減な格好、周りから色がつてないといわれるが、暖かさを選んでいるだけなので問題はない。

よも  
今帰りな

「ああ、薰也？」

「いつの名前は神城薰、  
かみしげかおる  
いわゆる爽やかの男だ。」

しかしそれは表向きでの姿であり、裏では汚いことをしまくつてい  
る最低の野郎だ……ごめん嘘

今だつて整つた顔立ちを最大限に使つた笑顔で俺に笑いかけている

今だつてその笑顔を見て鼻血を出したり倒れたりしている女子がい

る、古典的過ぎがじゅね?

まあいいや、とりあえず俺たちはいつも一緒に帰っている家が近いとかそういうのではないが途中までは一緒に帰っている。

今でもいゝも通りくたらなし話をして別れて帰る。そのはすた  
俺たちの足元になんかでつかい穴が出現するまでは・・・。  
というわけで、

# 落下開始。

いや、人って混乱するとまともな思考ができなくなるって言うけど

本當だね  
叫ぶことしができなかつたせ!

プロlogue前 現実逃避したっていいじゃないか（後書き）

次の話では異世界で一人を召喚した人の話です

プロローグ後 召喚します（前書き）

プロローグ後編です。まだ本編ではありませんよ～。

## プロローグ後 召喚します

SIDE ???

「今日この日の瞬間を持つて魔王を倒すため、勇者様の召喚の儀式を開始する！」

シン、とした空氣の中に私の声が響く。

今日は魔王を倒してもらうための勇者を召喚する大事な日だ。

私は召喚のための魔法陣を起動するために魔力を通す。

それと同時に魔方陣から光が発せられる。

最後に私の血をこの魔方陣に垂らせばいい。

私は事前に持っていたナイフで腕を軽く切る。

一瞬の鋭い痛みと共に軽い脱力感が自分を襲う。

ナイフで自分のみを切るなど初めてのことだから当然といえば当然だろう。

腕から滴る血を魔方陣に静かに垂らす。

魔方陣が発光する、それと同時に膨大な魔力が魔方陣から湧き出てくる。

魔方陣から出てくる魔力の量によつて勇者の力は決まるといわれている。

これだけの魔力だぞ強い勇者が出てくれるだろ、と私は期待に胸を躍らせていた。

しかし、何事にも例外というものはあるものだと私は思った。もしかしたら失敗するかもしれない、そんな不安感が私を襲つてくる。

しかしそんな私の不安も杞憂に消えた、魔方陣が爆発したのです。  
・・・私?避難しましたよ?じゃないと爆発に巻き込まれてしまつしまがい間違つて異世界にいきたくはないですからね。

しかし私はこのとき思いもしませんでした。

まさか、

魔方陣から出てきた人が一人もいたなんて。

## プロローグ後 召喚します（後書き）

次の話では主人公が異世界に到着します果てさてどうなることやら。  
・・（笑）

# 召喚された

SIDE

簡単だよ・・・。

何でこうなつたかってそりゃあ・・・（プロローグ前を見てください）だからだよ！

スカイタイピングが気持ちいいので行ってたやつがいたんだけど俺の感想はすごく痛い。

第一なんが、でござんことはな、たんがた、  
しかも隣のやつ（薰）見ろよ、すげえ笑顔で落下してくぜ？

俺？ ものすごく怖いね！

つてるからね！

俺もつともの静かだつたはずなのになあ・・・。

天国にいる母さん父さん（泣いてるカギー・・・・）  
俺は今やつやねーか！（泣かせや！）

そんな馬鹿なことを考えていると「ヤツホーこれってアレじやね？召喚ものの勇者な展開じゃね？」バカがうるさいことを言つていた

・・、じやなくて体が光に包まれた。

SIDE

???

どういふことでしょうか？

召喚の儀式には成功したようですが、その召喚陣の中から見えるのは一人分の人影です。

しばらくすると召喚時の煙が晴れて見えてきたのは金髪蒼眼の美形の男性と黒髪で眼は瞑っているため色はわかりませんがそこそこの整つている顔立ちの男性が出てきました。

召喚の儀式で一人の人間が召喚されたのは初めてです。

この場合どちらが勇者なのでしょうか？

どうやら、黒髪の男性のほうが先に立ち上りました。

なにやら周りを見渡しています、状況を把握しているのでしょうか？

なにやらもう一人のほうに何かささやいています。

しゃべり終えるとあきれたよにため息をつきゆっくつと立ち上がりました。

と思つたら急に懷から細長い何かを取り出して眼の辺りにまきつけ始めました。

何を考えているのでしょうか？

次にこちらのほうに体を向けてこひらに向かってきます。

召喚した【巫女】として出迎えなければなりません。

私はお二人が離れてしまつ前にそちらに向かいました。

そしてすでに起き上がりつゝ黒髪の男性と起き上がり始めている金髪の男性に近きます。

すると近づいてきていた黒髪の男性よりも先に金髪の男性がこちらに来ました。

「ようこそいらっしゃいました【勇者】様。」

私がドレスを持ち上げながら挨拶をすると金髪の男性はなぜか喜び、黒髪の男性もなぜか顔色を悪くしておりました、何故でしょうか？ とりあえず私は挨拶をすることにしました。

「私はステア・ミーティアといいます。」

「はじめまして、俺は神城薰だ。（ニコラ）」

・・・・・・・・・・・・ハッ！ どうしたんだしようか

私は。

ただ挨拶されただけです、それなのになんだか胸が熱くなつてしましました。

これが恋というものでしょうか？

そうやつて放心していると神城様の後ろ男性が「・・・朝比奈夜々だ。」と名乗りました。

こちらの男性からは何も感じませんね、それどころかなにかあきれている表情をしていてなんだかむかつとしてしまいます。  
それ以降もなにやらぶつぶつとつぶやいていますがよく聞こえません。

ん。

そんなことより神城様が何かい言いたそうです。

そちらを聞くことにしましょう。

召喚された・・・(後書き)

零条(以降「れ」)：「なんか微妙なところまで終わりました。(泣)

夜々(以降「や」)：「ならもひとつちゃんと書けよ。」

れ：「・・・何故お前がここにいる?」

や：「いや、なんか暇だったから。」

れ：「だからって入ってきちゃダメでしょ?」

や：「いいじゃないか、俺たちの仲だし?」

れ：「俺たちの仲って矢田!ナンパ!?」

や：「ちげえよ!って言つかお前女なの?!

れ：「禁則事項です(=口ッ)」

や：「うわ!すつ」と笑顔だよここに。」

れ：「まあ私の性別のことはおいといて」

や：「もう流すのか・・・。」

れ：「次回はやーちゃんがなんかなります。」

や：「なんかつて何?つていうかやーちゃんつて俺のことか?!

れ：「当たり前じやないかやーちゃん、といつても今回しか呼ばないかも知れな

いけど・・・。」

や：「ぜひそうしてくれ・・・。」

れ：「まあ予告はあくまで私の予想で言つてるのでなので実際そうなるとは限りません!」

や：「お前作者だろーちゃんとした事実に基づいて予告しきよー。」

れ：「だつてそうするとその範囲でしかかけないじゃないか?」

や：「そうかもしれないけどよ。」

れ：「そろそろ疲れたからそろそろ終わるね。」

や：「(だべつただけなきがするけど・・・)・・・やつだな。」

れ：「ふんつ!(ドカッ!)」

や：「いつてえ何で殴つた!?

れ：「国語辞典。」

や：「そりばなく痛いよー。せひじやなくて俺が聞いてるの理由だよー。」

れ：「たべつてただけとかおもつてたでしょ？」

や：「なんでわかつたんだ？！」

れ：「それではまだ次回。」

や：「ちょっと答えろよー。」

れ：「バイバーイ！」

れ：「無視するな——————」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8933s/>

---

黒き旅人はのんびりと世界を渡らされる

2011年10月8日23時26分発行